

青年期における居場所感の変容プロセス

－ 共同体的友人関係と機能体的友人関係に着目して －

立命館大学大学院
応用人間科学研究科
臨床心理学領域
土肥 雅子

本研究は、友人関係における「居場所」に着目し、青年期において「居場所」を実感していくプロセスを明らかにすることを目的として行った。それにより「居場所」がないと感じる人たちへの支援の在り方を考えるきっかけにもなり得ると考える。

「居場所」を実感している大学4年生6名を対象に半構造化インタビュー調査を実施した。そして得られた語りをもとに共同体的友人関係と機能体的友人関係に分類し、M-GTAを用いて分析を行った。

その結果、共同体的友人関係において6個のカテゴリーと14個の概念が生成された。【(1)表面的なつながり】、【(2)親密的なかかわり】、【(3)理解の深まり】、【(4)内面的なつながり】に至り、その後【(5)変わらない関係】が続く、もしくは【(6)離れ離れ】となるプロセスが明らかになった。機能体的友人関係においては6個のカテゴリーと29個の概念が生成された。【(1)馴染めない違和感】、【(2)組織への親しみ】、【(3)受動的感覚】、【(4)意識の変化】、【(5)主体的活動】、【(6)能動的感覚】へと至るプロセスが明らかになった。

居場所感の変容には、自分自身、相手との関係性、場の変容の3つの変容が含まれている可能性が考えられた。関係性を重視しており、「居場所」とは人間関係を築いていくプロセスともいえる。本研究において「居場所」を提供するだけでなく、プロセスの段階に応じて関係性へ働きかけることの必要性が示唆された。